

はなし

抄

うちは小さな印刷会社ですが、10年ほど前、地元飲料メーカーからの依頼でペットボトルの再生材で名刺

バナナは世界125カ国以上で栽培されており、その大部分は貧困国です。これまで捨てられていた茎の部分がバナナペーパーの原料として活用されるようになるれば、現地の暮らしが豊かになるのです。
加えて、バナナは成長が早い。伐採して実を採るとすぐ茎が生えてきて、7、8カ月後には、再び実が採れます。先進国が消費する紙の原料をバナナに切り替えていけば、環境と貧困問題の両方が救えるのです。

「エコ名刺」普及に取り組む印刷会社社長 阿部 晋也さん

(6日、札幌市白石区で開かれたJICA札幌の国際協力イベントから)



バナナの茎で紙貧困と環境問題解決の糸口に

を作ったのを機に、再生材を使った「エコ名刺」の取り扱いを始めました。現在は15種類ほどを展開し、延べ2万5千人以上の利用があります。

バナナペーパーを使うようになったのは3年ほど前、環境保護などに取り組む団体の講演で「バナナが地球を救う」と聞いたのが始まりでした。講師の紹介でバナナペーパーを取り寄せ、名刺の販売を開始しました。

今年9月からは新たに、アフリカ・ザンビア産のバナナペーパーを使った商品販売も開始しました。これは、うちの名刺の顧客である環境コンサルタント、ペオ・エグベリさんの存在が実現できたことです。

ペオさんはスウェーデン出身で今は東京に住み、テレビやラジオへの出演を通じて環境問題について幅広く提案している方です。アフリカには、保健医療などの知識が不足しているために平均寿命が37歳の村もあるそうで、ペオさんはこうした現状を解決しようと、自分のお金で3年ほど前、ザンビアに「ワンプラネットカフェ」という名のインターネットカフェを設け、住民に学ぶ環境を提供しています。

そんなペオさんから、ザンビアでもバナナペーパーは作れるかと聞かれ、楽天的な私は「多分できると思いますよ」と答えました。するとペオさんはすぐザンビアに赴きました。準備と資源量調査のためです。そしてこの春からは、バナナペーパー作りが始まりました。

女性たちは、バナナの茎からタマネギの皮のような繊維を取り出し、乾燥させる作業を行います。特に安全対策や労働時間などの管理は、ネットカフェが力を入れていきます。

現地では、現金収入を得るために、やむなく違法伐採や違法狩猟をする男性が多いそうです。女性に至っては、働く場はほとんどありませんでした。そんな中で女性が働く喜びを知り、生まれて初めて収入を得るようになったのは、非常に大きな意義があります。

あべ・しんや 1971年、札幌市生まれ。札幌大学経済学部卒業後、富山県の接着材メーカー勤務を経て、92年札幌市豊平区の丸吉日新堂印刷入社、96年から同社2代目社長。2002年から「エコ名刺」の製造、販売開始。40歳。